

## 『萬葉集』の〈こころ〉と〈つま〉たち

森田 孟

## (一)

詩歌とは言うまでもなく、人間の心の心への心の訴えが、言葉に形象化されたものである。作者の心が、心を言葉の表現によつて、読者の心に訴え掛けるのには、何も「心」なる語を用いる必要はない、というよりむしろこの語は使わないで〈心〉は表現される場合が遥かに多いし、その方が詩歌として効果は高くなるだろうが、「心」なる語もまた、言葉の一つであるから、作中に用いられても何ら差し支えなく、当然ながら色々と駆使されうるものである。現に、『萬葉集』でも、「こころ」なる語が直かに作中に様々に用いられている。

全てが漢字表記によるこの詩歌集で、〈こころ〉は如何なる文字で表されているか、その文字の違いに何らかの意味があるか、そして「こころ」なる語は如何様に用いられているか、を検討してみたい。

まず、「こころ」と現在訓まれている文字を、その現われる順に、詩歌のみならず前書きや左注、書翰の文章も全て含めて、必要最少限の前後の表現と共に拾い上げて列挙することにする。次の表の、巻数を表わす欄の「●」印は、「心」なる文字が熟語の中に現われていて「こころ」とは訓まれていないものを示す。歌番号の上の「前」「後」は、その歌の前(詞章、題詞)の、及び後(左注)の文章を指し、詩歌作品ではない。「別」は「一本の

歌に曰く」としての別歌のことで、「二云」のあるものと共に本稿では独立した一首として扱っておく。「ころ」の表記文字欄の「\*」印は、異訓の存在、あるいは校合上の問題になっていることなどを示すもので、それについては改めて後に触れる。

本稿は、西本願寺本萬葉集を底本として、竹柏會複製西本願寺本萬葉集を使用し、引用・言及の表現の字体は印刷上及び現代の一般読者の便宜上、現行の文字を原則として使用している。拾い出してある表現のうち「ころ」は、表音方式のものは全て「ころ」と表記し、他は原文中の文字をそのまま使った。「ころ」の前後の表現の文字については、底本の文字を、表音方式の場合には尊重して使い、全くの仮名としての表音方式の場合は、現行の読み下しの表記に普通に使われる漢字仮名混じりの表記にしてある。それについては本稿では原則として、新編日本古典文学全集『萬葉集』(一)～(四)(小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳)小学館(一九九四・一九九六年)——以下本稿では(小)と略記——に依拠する。以下の文中、例えば、①五、は巻一の五番歌という意味である。

卷	歌番号	原字	表	現
一	五	心	むらきもの心を痛み	
	々	情	焼く塩の念ひぞ焼くる吾が下情	
	八	情	感愛の情を起こしたまふ	
	一七	情	情無く雲の隠さふべしや	
	一八	情	雲だにも情有らなも隠さふべしや	
	三六	心	清き河内と 御心を 吉野の国の	
	七一	情	寐の寝らえぬに情無く	
	八二	情	うらさぶる情さまねし	
二	九八	心	後の心を知りかてぬかも	
	九九	心	後の心を知る人ぞ引く	
	一〇〇	情	妹は情に乗りにけるかも	
	一二六	意	意に書を寄せむと欲へども	
	々	心	また心契の果らぬことを恨む	
	一三五	心	肝向かふ心を痛み 念ひつつ	
	一四四	情	結び松情も解けず古 念ほゆ	
	一四五	意	歌の意を准擬ふ	

一七六	情	仕へ奉りし情違ひぬ	二五三	心	思へれば心恋しき加古の鳥見ゆ
一九〇	心	真木柱太き心は有りしかど	二六六	情	汝が鳴けば情もしのに古念ほゆ
一九六	心	この吾が心鎮めかねつも	三四六	情	酒飲みて情を遺るに
二〇七	情	慰もる情も在らず	三七二	心	雲居なす心いさよひ
二二六	意	慰もる情も有りやと	三八一	情	家思ふと情進むな
二三〇	心	柿本朝臣人麻呂が意に擬へて報ふる語れば心ぞ痛き	三九七	情	結びし情忘れかねつも
前			四三七	心	妹が悔ゆべき心は持たじ
後			四五〇	情	一人過ぐれば情悲しも
四七二	情	痛き情は忍びかねつも	四五三	情	情咽せつつ涙し流る
四七一	情	山隠しつれ情神もなし	四五七	心	君しまさねば心神もなし
四六七	情	情哀しい行く	四五八	心	心の中に感緒ひて作る歌
四六六	情	そを見れど情も行かず	四六六	情	そを見れど情も行かず
四六二	情	情哀しい行く	四六二	情	情哀しい行く
四六一	情	情ゆも我は念はずき	四六一	情	情ゆも我は念はずき
四六〇	情	情ゆも我は念はずき	四六〇	情	情ゆも我は念はずき
四五九	情	情ゆも我は念はずき	四五九	情	情ゆも我は念はずき
四五八	情	情ゆも我は念はずき	四五八	情	情ゆも我は念はずき
四五七	心	吾妹子に心も身さへ縁りにしものを遠けども情し行け	四五七	心	情のみ咽せつつ有るに
五五三	情	衣染むといふ紫の情に染みてたわやめの恋する情に比ひ有らめや	五五三	情	情ゆも我は念はずき
五五二	情	情ゆも我は念はずき	五五二	情	情ゆも我は念はずき
五五〇	情	情ゆも我は念はずき	五五〇	情	情ゆも我は念はずき
五〇九	情	情ゆも我は念はずき	五〇九	情	情ゆも我は念はずき
五〇五	情	情ゆも我は念はずき	五〇五	情	情ゆも我は念はずき
五〇四	情	情ゆも我は念はずき	五〇四	情	情ゆも我は念はずき
五三〇	情	情ゆも我は念はずき	五三〇	情	情ゆも我は念はずき
五三五	意	更に愛しふる心を起す	五三五	意	更に愛しふる心を起す
五三六	心	心在るごとく思ひ吾が背子	五三六	心	心在るごとく思ひ吾が背子
五三八	心	情のみ咽せつつ有るに	五三八	心	情のみ咽せつつ有るに
五三七	心	情のみ咽せつつ有るに	五三七	心	情のみ咽せつつ有るに
五三七	心	情のみ咽せつつ有るに	五三七	心	情のみ咽せつつ有るに
三九七	情	情のみ咽せつつ有るに	三九七	情	情のみ咽せつつ有るに
三八一	情	情のみ咽せつつ有るに	三八一	情	情のみ咽せつつ有るに
三七二	心	情のみ咽せつつ有るに	三七二	心	情のみ咽せつつ有るに
三四六	情	情のみ咽せつつ有るに	三四六	情	情のみ咽せつつ有るに
二六六	情	情のみ咽せつつ有るに	二六六	情	情のみ咽せつつ有るに
二五三	心	情のみ咽せつつ有るに	二五三	心	情のみ咽せつつ有るに
二二六	意	更に愛しふる心を起す	二二六	意	更に愛しふる心を起す
一九六	心	心在るごとく思ひ吾が背子	一九六	心	心在るごとく思ひ吾が背子
一九〇	心	情のみ咽せつつ有るに	一九〇	心	情のみ咽せつつ有るに
一七六	情	情のみ咽せつつ有るに	一七六	情	情のみ咽せつつ有るに

四									
六九一	六三八	六四五	六四七	六五三	六五七	六七一	六七三	六八二	六八七
六九一	六三八	六四五	六四七	六五三	六五七	六七一	六七三	六八二	六八七
意	心	心	心	情	意	情	心	情	情
かにかくに意は持たず大船の 月か経ぬると心遮ひぬ	日を近み心に咽ひ音のみし泣かゆ 心には忘るる日なく念へども	情には忘れぬものを	はねず色の変ろひやすき吾が意かも 惑へる情念ひあへなくに	まそ鏡磨ぎし心を縦してば ねもころに情尽して恋ふる吾れかも	愛しと吾が念ふ情：崩えなむ	情に乗りて念ほゆる妹	人の情を尽さく念へば	恋草を：積みて恋ふらく吾が心から	情のうちに恋ひわたるかも
七〇五	七一一	七一三	七一四	七一六	七一八	七二〇	七二五	七二五	七二五
情	心	情	情	情	心	情	情	情	情
浮きたる心吾が念はなくに	情たゆたひ逢はぬこのころ	情には思ひわたれどよしをなみ	吾が恋ふる情はけだし夢に見えきや	夢に見て心のうちに燎えつつぞをる	むらさきもの情摧けて	には鳥の潜く池水情有らば	君に吾が恋ふる情示さね	君に吾が恋ふる情示さね	君に吾が恋ふる情示さね
●									
●									
七三五	七七〇	七八九	七九三	七九四	七九六	八〇〇	八〇二	八〇六	八一二
情	情	情	心	許る呂	許る呂	許る呂	心	意	心
霞たなびき情ぐく：独りかも寝む 逢はなくのみぞ情さへ妹を忘れて	情ぐく念ほゆるかも春霞たなびく	永に崩心の悲しびを懷き	ころろゆも思はぬ間	語らひしころろ背きて	妹がころろのすべもすべなさ	惑へる情を反さしむる歌	子を愛したまふ心有り	また抱梁の意を傷ましむ	恋望の殊念は常の心に百倍す
八一五	八五三	八六四	八八六	八八九	八八九	八八九	八八九	八八九	八八九
情	心	心	心	心	心	心	心	心	心
何をもちてか情を擡べむ	たた性水に便ひ、また心に山を樂し	心神の開朗にあること	古旧を懷ひて志を傷ましめ	徳を仰ぐ心	心葵藿に同じ	自らに心を傷むる恨みあらむ	慰むるころろはあらまし	曾て作悪の心無し	心も亦塵に累ふをもちて



一六四	心	念ふ心は聞こえ来ぬかも	二〇三三	*神	しづまりて神競へばときまたなくに 幣を奉る情は君を幸く来ませと むらきもの心いさよひ
一六二九	情	そこ故に情なぐやと	二〇六九	情	さ雄鹿の心相念ふ秋萩の ますらをの心は無しに秋萩の 別くこと難き吾が情かも
一六三三	情	見れども飽かず情尽さむ	二〇九二	心	秋山の情に飽かず過ぐしつるかも 心無き秋の月夜の物念ふと 生ひ靡き心は妹に依りにけるかも をみなへし堪へぬ情に尚恋ひにけり 来まさぬ君は何情ぞも
一六五三	心	今のごと心を常に念へらば	二〇九四	心	或者人のあな情なと念ふらむ 石に触れ君が摧かむ情は持たじ 心には千遍に念へど人に言はぬ ますらをの現し心も吾れは無し 恋しき心まして念ほゆ
一六六一	心	梅の花心開けて吾が念へる君	二一二二	心	心を異には我が念はなくに 甚だ利心の失するまで念ふ しくしくに妹は心に乘りにけるかも 山川のたぎつ心を塞かへたりけり 外行く波の外心吾は思はじ 意追り見つつも居らむ
一七四〇	情	たちまちに情消失せぬ	二一七一	情	
一七四一	心	*心行 剣刀己が心からおそやこの君 心悲しく	二二一八	情	
一七四三	心	心のうちに恋ふるこのころ	二二二六	心	
一七六八	心	心さへ消え失せたれや言も通はぬ	二二四二	心	
一七八二	心	肝向ふ心摧けて	二二七九	情	
一七九二	心	吾が念ふ情安きそらかも	二二九五	情	
一八〇四	意	射ゆ鹿の意を痛み	二三〇二	情	
一八〇五	心	かぎろひの心療えつつ	二三〇八	情	
一八〇六	心	心乱れて	二三七一	心	
一八〇七	意	(一云)意尽して	二三七六	心	
一八〇八	意	情苦しも	二三九二	心	
一八〇九	意	春の野に意述べむと念ふどち	二四〇〇	心	
一八八二	心	月夜さし下心吉しうたてこのころ	二四二七	心	
一八八九	心	妹は心に乘りにけるかも	二四三二	心	
一九一六	心	春雨の情を人の知らざらなくに	二四三四	心	
二〇一六	心	ま日長く恋ふる心ゆ秋風に	二四五二	*意	

二四六九	心	うらぶれて心も深く吾が恋ひやまず
二四七一	心	妹が心を吾が念はなくに
二四八二	心	玉藻のうち靡き心は依りて恋ふる
二四八八	*心	磯の上に立てるむろの木心哀 <small>いへるこころ</small>
二四九六	心	染木綿の染みにし心我忘れめや
二五一一	*心	常滑のかしこき道ぞ汝が心ゆめ
二五二二	心	外のみぞ見し心は念へど
二五二三	心	少なくも心のうちに吾が念はなくに
二五二五	情	吾が情利の生けるともなき
二五二八	心	思ひ悔ゆべき心は持たじ
二五三五	*行	凡ろかの行は念はじ
二五三七	心	吾が持てる心はよしあ君がまにまに
二五四一	心	妹を置きて心空なり土は踏めども
二五五二	情	情には手遍にしくしく念へども
二五六六	情	情のうちの隠り妻はも
二五七一	心	なくさる心もあらむ我ぞ苦しき
二五七三	情	情さへ奉れる君に
二五七九	情	相見むと念ひし情今ぞなきぬる
二五八一	心	少なくも心のうちに我が念はなくに
二五九六	心	なくさる心はなしに
二六〇二	心	結びてし心ひとつを今解かめやも
二六〇三	心	心をし君に奉ると念へれば
二六五七	心	いはへども人の心は守りあへぬもの
二六九九	意	瀬を速み意は念へど直に逢はぬかも
二七〇一	心	石橋の遠き心は思ほえぬかも
二七二一	情	恋のよどめる吾が情かも
二七二四	心	木積成す心は依りぬ
二七四八	心	しみにも妹は心に乗りにけるかも
二七四九	情	直乘りに妹は情に乗りにけるかも
二七五八	心	ますらを心念ほえぬかも
二七七九	心	打ち靡き心もしのに念ほゆるかも
二七八〇	情	靡き藻の情は妹に因りにしものを
二七八五	心	我が恋ふる心のうちは止む時もなし
二七九二	意	玉の緒のうつし意や年月の
二八一六	心	天雲のたゆたふ心吾が念はなくに
二八三五	心	小野の浅茅を心ゆも人引かめやも
二八四二	心	我が心としみ念ふ
二八四五	意	物語りして意遣り過ぐせど過ぎず
二八五六	心	心鈍く手向けしたれや
二八七四	情	情をぞ使に遣りし夢に見えきや
二八七五	心	ますらをと思ひし吾れや雄心も無き
二八八七	意	たどきも知らず吾が意天つ空なり
二八九四	心	我が胸は破れて摧けて鋒心も無し
二九〇二	情	百重成す情し念へばいたもすべなし

二九〇四	心	なぐさもる心し無くは生きて
二九〇七	神	ますらをの聡き神も今は無し
二九〇八	心	しましくも心安めむ事計りせよ
二九一〇	心	心には千重に百重に思へれど
二九一一	心	少なくとも心のうちに吾が念はなくに
二九二一	情	たわや女は同じ情にしましくも止む
二九三二	情	情には燎えて念へど
二九四四	情	逢はずして情のうちに恋ふる
二九四九	心	うたて異に心鬱 <sup>しづ</sup> 悒 <sup>せ</sup> し事計り
二九五〇	情	情空なり地は踏めども
二九五五	情	夢かと情班 <sup>まよ</sup> ひぬ
二九六〇	情	うつせみの現し情も吾れは無し
二九六一	心	継ぎてし聞けば心遮 <sup>まよ</sup> ひぬ
二九七七	心	紐の緒の心に入りて恋しきものを
二九八三	心	高麗剣己が景迹から外のみに見つ
二九八五	心	知らねども心は君に因 <sup>よ</sup> りにしものを
二九八六	心	すでに心は因りにしものを
三〇一九	心	川淀の淀まむ心思ひかねつも
三〇二五	情	君に恋ふらく吾が情から
三〇二八	心	結びてし妹が心は疑ひも無し
三〇三一	心	天雲のたゆたひやすき心有らば
三〇四七	心	松が根の君が心は忘れかねつも

  

三〇五五	心	君を念へかも吾が心神 <sup>こころ</sup> のころこはなき
三〇五七	意	意ぐみ吾が念ふ見らる
三〇五八	情	鴨頭草の移ろふ情吾が思はなくに
三〇五九	情	月草の移ろふ情吾れ持ためやも
三〇七一	心	さな葛絶えむの心我が思はなくに
三〇七四	情	はねず色の移ろひ安き情有れば
三〇九九	心	伏す鹿の野は異にして心は同じ
三一二二	心	心無き雨にも有るか人目守り
三一二二	心	浜松 <sup>はまのまつ</sup> 心哀 <sup>かな</sup> 何しか妹に
三一二三〇	*心	みをつくし心尽して念へかも
三一二六二	心	ゆくらかに妹は心に乗りにけるかも
三二七四	心	玉の緒の徙 <sup>うつ</sup> し心や八十梶 <sup>か</sup> かけ
三二四二	意	人は衝けども意無き山の
三二五〇	心	吾が念ふ心知らずや
三二五一	心	恋ふれかも心の痛き
三二五五	心	尽す心は惜しけくもなし
三二五五	心	處女らが心をしらに
三二五八	心	かり薦の心もしのに
三二六六	心	吾が恋ふる心のうちを人に言ふ
三二六七	情	打ち靡き情は因りて
三二七一	情	打ち靡き情は妹に因りにけるかも
三二七一	情	我が情焼くも吾れなりはしきやし



153

十七	三七七五	己許呂	異しきころを我が思はなくに
十六	三七八四	許己呂	ころなき鳥にぞありける
十五	三七八五	々	我が思ふころいたもすべなし
十四	前三七八六	心意	今し壮士の意、和乎し難きことあり
十三	前三七八八	志心	おのおのも心緒を陳べて作る
十二	前三七九一	心	三人の雄の志、 <small>をのこ</small> 平し難きこと石の如
十一	三七九七	心	おのおのも所心を陳べて作る
十	三八〇〇	情	迷惑ふ心、あへて禁ふところなし
九	前三八〇三	意	死にも生きも同じ心と結びてし
八	後三八〇六	意	思ひたる情は知らゆ
七	三八〇七	心	時に娘子の意に
六	後三八〇七	意	やくやくに猶予ふ意有り
五	後三八〇七	意	山の井の浅き心を吾が念はなくに
四	後三八〇八	意	時に王の意悦ばずして
三	三八一一	情	すなわち王の意解け悦びて
二	後三八一三	心	その鄙人の意に
一	後三八一五	意	妻を愛しふる情を増す
〇	後三八三五	心	むらきもの心砕けて
	後三八三八	心	係恋に心を傷ましめ
	前三八三八	心	ここに父母が意に
		心	御心の中に感緒づ
		心	心の著く所無き歌

三八五〇	心	心をし無何有の郷に置きてあらば
三八五七	情	あかねさす君が情し忘れかねつも
後三八六九	志	志は兄弟より篤く
三八七五	志	志を述べてこの歌を作る
心	心	寒水の心もけやに念はゆる音の
●七	心	おのおの心も所心を述べて
前三八九〇	心	詎に志を賜べざらめや
前三九一一	志	以つて鬱結の緒を散らさまくのみ
三九一二	緒	ほととぎす何の情ぞ
後三九一四	情	以つて思慕の意を陳ぶ
三九四〇	意	万代にこころは解けて
三九五〇	意	解き放けす念ふ意を誰か知らむも
後三九六一	情	情を二眺に寄せ
三九六二	心	いささかに所心を裁る
前三九六二	緒	もちて悲しびの緒を申ぶる
三九六二	情	ますらをの情振り起し
情	情	待たすらむ情寂しく
情	情	恋ふるにし情は燃えぬ
●	*意	淡交に席を促け、意を得て言を忘る
前三九六七	心	不質の恩は慰を陋心 <small>ろうしん</small> に報ふ
前三九六九	心	慰むるころはなしに
三九六九	心	慰はせる君が心をうるはしみ



156

●	四四六六	己許呂	名に負ふ伴の男 ころろつとめよ
	後四四七三	心	いささかに所心を陳ぶ
	四四七八	許己呂	薄ら氷の薄きころを我が思はなくに
	四四七九	其己呂	焼き大刀の刀ころも我れは思ひかねつも
	四四八二	許己呂	君がころろは忘らゆましじ
●	四四八三	許己呂	ころろ痛く昔の人し思はゆるかも
	前四四九三	意	堪のまにま意のまにま
	四四〇〇	心	おのおの心緒を陳べ
	己許呂		ころろもしのに君をしぞ思ふ

この表から判ることを、若干の説明と共に巻毎に順に記したい。

卷一——「心」から始まるが、「情」の方が優勢である。

卷二——文章中には「意」だけを使う。作品では「心」と「情」は殆ど同数で前者が一回多い。

卷三——作品だけを見ると、〈心・情・情〉が三回反復されて、「心」が一回出て来て、後は、「情」が四回続き、「心」が四回続く。別に、何らの規則性もないであらう。

卷四——卷十一、十二と共に最も多く「ころろ」が現れる。文章に「意」と「心」が一回ずつ使われる。「情」が「心」の二倍以上、圧倒的に多く現れ、「情」が何度か続くと「心」が一、二度出てくる。

卷五——表意方式と表音方式の表記が混淆し、文章の多い巻で、ここでは「心」の方が「情」を圧倒して断然多い。表音方式の「ころろ」が用いられる中で、作品では巻の終りの方の二作に「心」が用いられている。

卷六——「ころろ」の現れる最少の巻で、作品には全て「情」、文章は全て「心」である。

卷七——「心」が「情」の二倍多く現れる。

卷八——「情」がやや「心」より多い。

卷九——一七四一番の「心」は底本であるが、(藍)(壬)(類)(紀)によつて「行」と改訂されうるもの。一七四三番の第三句「心悲久」には、「うらがなしく」(全註、岩)の他、「ころろがなしく」(私註)の訓があり、(小)は、原文「心悲久」はウラガナシクと読むべき表記だが、意味と音数の制限とを考慮して「まかなしく」

と読む、としている。一八〇五番の「ころ」だが、「乱れて」と続く時は「心」だが、「尽して」となる時は「意」なのだろうか。「心乱れて」の例は集中この一例しかなく、「みだるる許己呂」(⑦四〇〇八)は表音方式なので、これは何とも言えない。表意方式で最も多い文字は「心」であり、表音方式で最も多いのは「許己呂」であるが、だからと言って、表音方式の「許己呂」は表意方式の「心」に相当するとは、他の例をざっと検討した限りでは今のところ一概には言えない。「心尽して」(⑦一三二〇)、「情尽して」(④六八二)の例を見れば、「尽して」だから「意」を用いたのではなく、単に文字を変えたにすぎまい。「尽して」と繋がる「ころ」は、「心」「情」「意」が存在するのである。

卷十——「心」と「情」が全く同数である。二〇三三番は、第三句以下「定而神競者磨待無」には定訓なしとされていて、「さだまりてかみしきほへばとしまたなく」(全註)「まろもまたなく」(注釋)、あるいは本稿が筆者の好みで採った訓(私注)、などがある。「次点」サタマリテコ、ロクラベバトキマタナクニ」をはじめ諸説があるが、いずれも定訓と言えない(小)。「神」を「ころ」と訓む例は集中もう一例、⑫二九〇七にあり、これには別に異訓はないようだ。

卷十一——集中、この巻に「ころ」が最も多く使われており、その四分の三は「心」で、圧倒的に多い。

二四五二番の第三句「意追」は、「なぐさめて」の訓も多いようだが、(そして、二四一四番では同じ「意追」を「なぐさめ」と訓ませているが)、(全註、岩、塙)と共に(小)も「ころやり」と訓むので、本稿は「意」を「ころ」と訓むことにする。二四八八番の第三句「心哀」には、「ころいたく」(全註)の訓もある。尚、「ねもころに」と訓む「心哀」は、(と言っても、底本の原文は「心裳」であるが、(元、類)によって「心哀」と改められるのだが)もう一例、⑫三三三〇にある。因に、「ねもころ」に、の、ころに」は集中二九回使われ、今挙げた「心哀」の二回以外を示せば、次のようになる。

「懃」——②二〇七、④五八〇、④六八二、④七四〇、④七九一、⑦一三二四、⑪二五二五、⑪二七五八、⑫三〇五一、⑫三〇五三。

「根毛許呂尔」——④六一九。／「叩々」——⑧一六二九。／「根毛居侶」——⑨一七二三。

「惻隱」——⑪二三九三、⑪二四七二、⑪二四七三、⑫二八六三。／「根母己呂尔」——⑪二四八六別歌。

「惻隱々々」——⑫二八五七。／「懃懃」——⑫三〇五四。

「懃懃」——⑫三一〇九、⑬三二九一。

「根毛一伏三向凝呂尔」——⑬三二八四。「一伏三向」を「コロ」と訓ませるのは、幸田露伴の所謂「まことに暇多き大宮人」の愉快な遊び心の仕業の一つであり、これを最初に訓み解いた人の満足はさぞかしと同慶の至りではあるが、それにしても、巫山戯るのもいい加減にしろ、と怒鳴りたくもなる。尤も、漢字を並べての表記などという単調で辛気臭い作業をする身になれば、この種の巫山戯心も無理はないと首肯できようか。

「祢毛己呂尔」——⑭三四一〇。／「祢毛許呂尔」——⑰四〇一一。／「根毛己呂尔」——⑱四一一六。

「祢母許呂其呂尔」——⑳四四五四。

二五一一番の結句は、定本は「戀由眼」で、このままで「こふらくはゆめ」（全註、岩、塙、小）の訓があるが、影印本を熟視すると「戀」は「爾」（異体字は、尔、尔、心）を凝縮したような字に見えて、本来の「戀」ではないようにも思われるせいか、この結句は「尔心由眼」（古義）と改訂されて「ながこころゆめ」とも訓まれている（桜、新、角）。意味はどちらも同程度に通じようである。「ながこころゆめ」は集中もう二例、⑦一三五六「汝情勤」と、⑬三三〇五「汝心勤」がある。本稿では「こころ」の例が一つ増える方を選った。

二五三五番の第二句「行者不念」には、「わざはおもはじ」（全註）、「わざとはおもはじ」（注釋・別案、塙、小）の訓があり、特に（小）の注解は行き届いていて説得力に富むので、「わざとは」に賛成したいが、本稿ではやはり、「こころ」の例を増やすことにして、「こころはおもはじ」（桜、新、角）を選った。

卷十二——前の卷十一に次いで、集中では詩歌作品には二番目に多く「こころ」が使われていて、「心」が「情」の二倍余多く、「意」「神」の他に、最大の特徴として、二九八三番の「景迹」がある。この第二句「己之景迹故」の「わがこころから」には「おのがわざゆめ」（私注）の訓もある。「景迹」は立派な行いのことであり（小）

は、魂胆、心構え、の意と注解。元来、律令用語であることも丁寧に指摘する）、同じ様に立派な行いや徳を表わす語「景行」と共にその古訓は「コロロハセ」であるので（前者は「天武紀十一年」、後者は「名義抄」参照）、「景迹」を「ころ」と訓む根拠は十分にあるのだろう。この二字の「ころ」に比べれば、⑩四〇一五の左注の文章の「精神」を「ころ」と訓むのは、現代の我々には受け入れるのが遥かに容易であろう。

三三三〇番の第三句は、底本は「心裳」で、このままで「ころゆも」（新校）の訓もあるが、（元、類）によって「裳」は「哀」と改訂する説が強力のものである。「心哀」なら、⑪二四八八の第三句とおなじで「ねもころに」になるし、「浜松」「根も」と続くことになるが、「心哀」と改訂した上でこれを「ころいたく」（全註）、「ころかなしく」（私注）の訓もある。

卷十三——「心」が「情」より遥かに多い。

卷十四——表音式表記の巻で、十四首中に各一度ずつ使われる「ころ」は、九番目の「ころに乗る」（三五七）の時に突如、「許己呂」になるが、他は全て「己許呂」である。「ころの緒ろに乗る」（三四六六）時は「己許呂」なので、表記の変化に別に意味は見出せそうにない。ひょいと変化をつけたのか、それまでの「ころ」の一字目と二字目とが何気なく入れ替わったのか。

卷十五——「ころ」が比較的少ない巻で、「心」は文章の中にのみ現れる。「異しき情」（三五八八）と「異しき己許呂」（三七七五）が各々一度ずつ現れるが、この巻だけを見て敢えて言おうとしてみても、表音式の「己許呂」は表意式の「情」に当たるかなどとは言えない。

卷十六——文章の方に「ころ」が多い巻で、「志」が文章の方に出てくる。

卷十七——卷十四とは逆に「許己呂」の方が「己許呂」より遥かに多い。前三九一一の「志」は「ころ」と訓むことにする。前三九六七の「意」を「ころ」と訓めば「言」は「こと」であろうし、「意」を「い」と訓めば「言」は「げん」であろう。後三九八四、後四〇一五の「懷」は「ころ」と訓まれても、前三九八八、前四〇〇八、前四〇三六、前四〇四六、前四一二〇、前四一七七、前四一八〇、前四一九九、に出てくる「懷」



は「おもひ」と訓まれているようである。前四二八五、後四三二〇、の「拙懷」は「せっかい」と訓めばよいのだろうが、「つたなきおもひ」と訓んでもよいだろう。文章は漢文調のもの故、訓みは必ずしも一定はしない。

卷十八——この巻の詩歌作品の中で使われる四度の「心」は全て長歌の中である。表音式の「こころ」は底本では全て「許己呂」であるが、四二三番は（元、藍、類）によって「己許呂」と改訂されることになっている。表音式の表記の場合は完全な音記号なのだから、「こころ」と訓める表記ならいずれでもよい訳である。校合、校訂自体は必須の重要な基本作業であるが、この場合は「許己呂」を態々「己許呂」に変えても、この作品そのものにとつては殆ど意味はないとも言えよう。長歌とその反（短）歌に、「こころ」が一度ずつ出てくる他の全ての一対の場合、その「こころ」の表記が異なっている、とでもいうのなら、四一二三番の改訂は意味を持つ。元来の表記が、長歌—反（短）歌の対の場合に「こころ」が一度ずつ使われる際は、その表記を変化させたのだろうか、とでもいうことになって。しかし残念ながら、長歌—反（短）歌の対に「こころ」が一度ずつ現れる他の五例、③四六六—四六七（情—情）、④五四六—五四七（情—心）、⑤八九七—八九八（心—心）、⑨一七四〇—一七四一（情—心「行」）、⑬三二八九—三二九〇（情—心）は、同じ表記のものが二例ある。

因に、長歌に二度、その反（短）歌に一度「こころ」が使われる場合も六例である。⑤七九四—七九六（許呂・許呂—己許呂）、⑬三二五〇—三二五一（心・心—心）、⑮四〇九四—四〇九五（心・心—許己呂）、⑯四一〇六—四一〇七（心・許己呂—許己呂）、⑰四一八九—四一九〇（許己呂・情—情）、⑳四四六五—四四六六（許己呂・己許呂—己許呂）。三個とも同じ表記の例が一つあるし、組合せ・順序の型は、この六例には三通り—A AB、A AA、A BB—があることになる。要するに恣意的である。

序で見えておけば、長歌一首中に「こころ」が二度使われているものは更に次の十二例ある。①五（心・情）、③四七八（心・心）、④六一九（情・意）、⑨一七九二（心・情）、⑨一八〇四（意・心）、⑬三二五五（心・心）、⑮三六二七（己許呂・許己呂）、⑰三九六九（許己呂・心）、⑰三九七八（許己呂・情）、⑰四〇一一（情・心—表音式表記の作品なのに「こころ」は表意式表記である）、⑱四一一三（情・許己呂）、⑱四一六四（情・情）。

計十八例中六例以外は、別字を用いているので、変化させようと少しは考えたのだろうか。しかし面白いことに、長歌一首中に三度「ころ」が現れるのが二例あるが、三度とも同じ文字のものと、三度とも別字で表記しているものが一例ずつである。⑰三九六二（情・情・情——大半が表音式の作品である）、⑱四一五四（心・情・許己呂）。

短歌一首中に「ころ」が二度使われるものは次の三首であるが、偶然であろうが、「心」と「情」を各々反復して使うものと、一字ずつ用いているものが一例ずつある。②一九〇（心・心）、④七二五（情・情）、⑬三二七一（情・心）。

卷十九——「情」の方が「心」より圧倒的に多い。

卷二十——作品に「心」は用いられず、「許己呂」の方が「己許呂」より多く、また初めて表音式に、各一例ずつ、「己呂」「去里」「刀」其己呂」が現れている。

\*

「ころ」の全体の有様を一覧表で示してみよう。「ころ」の表記は結局十六通りになる。主なものは「心」「情」「意」と「許己呂」「己許呂」である。各巻に各々の表記が何回用いられているかが示されるが、その下の（）内の数字は、文章中に現れる「ころ」の数である。「心」なる文字は使われているが、それが「ころ」とは訓まれないものは□で示す。それが文章中のものであれば□で示される。◇は改訂してこの文字になるもので、◇が加えられている数字であることが\*印で示される。従って◇は合計の数には入っていない。\*印は、定訓なし、あるいは異訓のあるものが入っていることを示す。

表の見方を具体的に「全計」の欄で示しておこう。「心」は全巻の詩歌に一五〇回、文章中に四七回、その四七回のうちの二二回は「ころ」とは訓まれないものである。詩歌の中に使われる「心」で、三回は、「こ

卷	心	情	意	許 呂	己 許 呂	神	行	景 迹	許 己 呂	志	緒	懷	精 神	己 呂	去 里	其 己 呂	計	總 計	全 こころ 作品
1	2 (1)	5 (1)															7 (1)	8	(6) 84
2	6 ([1])	5 (3)															11 (4 [1])	15	(10) 150
3	8 (1)	10															18 (1)	19	(17) 249
4	11 (1)	28	2 (1)														41 (2)	43	(39) 309
5	2 (13 [2])	(2)	(1)	4	1					(1)							7 (17 [2])	24	(6) 114
6	(2)	3															3 (2)	5	(3) 161
7	14 ([1])	7	2														23 ([1])	24	(23) 350
8	6	8	1														15	15	(15) 246
9	*6 [1]	3	2				(1)										11 [1]	12	(9) 148
10	8	8	1			⊙1											18	18	(18) 539
11	⊙32 [1]	8	⊙3			⊙1											44 [1]	45	(44) 490
12	24 [1]	12	3			1		1									41 [1]	42	(41) 380
13	18	7	2														27	27	(24) 127
14					13				1								14	14	(14) 230
15	(4 [2])	1 (1)		1	2				6								10 (5 [2])	15	(9) 208
16	5 (6 [2])	2 (1)	(7)							(3)							7 (17 [2])	24	(7) 104
17	2 (6 [4])	7 (2)	1 (2)		2				10	(1)	(3)	(2)	(1)				22 (17 [4])	39	(17) 142
18	4 (7 [6])	1 (1)	(3)		(1)				*12	(1)							17 (12 [6])	29	(14) 107
19	2 ([1])	14 (1)	(2)						2	(1)							18 (5 [1])	23	(14) 154
20	(4 [3])	2 (2)	(1)		3				8					1	1	1	16 (7 [3])	23	(15) 224
全 計	150 (47 [22]) [3]	131 (11)	17 (20)	5	21 / (1)	2	1 / (1)	1	39	(7)	(3)	(2)	(1)	1	1	1	370 (91 [22]) [3]	464	(345) 4516

こころ」と訓まれていないものがある（「心悲しく」一回と「心哀」が二回である）。全ての「こころ」が十二通りの表記で詩歌作品に三七〇回現れ、文章中には七通りの表記で九一回、その九一回には、「心」が「こころ」とは訓まれていないものが二二回含まれている。詩歌と文章との中で用いられている「こころ」に、詩歌の中で使われていながら「こころ」とは訓まれない三回の「心」とを加えた総計が四六四——これが『萬葉集』全巻に現れる「こころ」である。「こころ」と訓まれる「こころ」が一度でも使われている作品は、全作品四五一六首（と、今は旧国歌大観通りとしておく）中、三四五首で、その全作品に占める割合は、七・六%強ということになる。

\*

『萬葉集』では、如何なる「こころ」が如何様に現れているかを、その姿を表わす表現のほぼ五十音順に整頓して示してみよう。「こころ」は、以下「K」で示し、その表記は、作品番号の後に示す。

茜さす君がK ⑩三八五七・情。／明きK ②四四六五・許己呂。／吾がK 明石の浦に（地名との掛け言葉）

⑮三六二七・己許呂。／御Kを明らめたまひ ⑮四〇九四・心。／浅きK ⑮三八〇七・心。／Kに飽か

ず ⑩二二一八・情。／Kいまだ飽かなくに ⑦二二二一・心。／堪へぬK ⑩二二七九・情。／Kは

動く ②四三九〇・去々里。

Kある ①一八・情。②一九〇・心。②一九六・情。②二〇七・情。④五三八・心。④七二五・情。⑦一三六六・意。⑧一四七六・心。⑧一四八〇・心。⑫三〇三一・心。⑫三〇七四・情。⑬三三三八・情。⑮四一〇七・許己呂。⑮四一二五・許己呂。⑮四一七九・情。

K労はし ⑬三三三五・心。／Kのうちを人に言ふ ⑬三二五八・心。／今のK ⑫三二九〇・心。

痛きK ③四七二・情。／K痛し ⑧一五一三・情。／K痛く ③四六七・情。②四四八三・許己呂。／Kの

痛き ⑬三二五〇・心。⑬三三二九・意。／Kし痛し ⑬三三一四・心。⑰四〇〇六・許己呂。／Kぞ痛き ②二三〇・心。⑳四三〇七・許己呂。／Kを痛み ①五・心。②一三五・心。⑨一八〇四・意。⑱四一二二・許己呂。／K痛み ⑭三五四二・己許呂。

Kいたもすべなし ⑮三七八五・許己呂。／<sup>いもと</sup>憤るK ⑱四一五四・許己呂。／Kいさよひ ③三七二・心。⑩二〇九二・心。／Kいぶせし ⑫二九四九・心。⑧一五六八・情。(み)／Kに入る ④五一四・情。⑫二九七七・心。

木の葉落ちて浮きたるK ④七一・心。／薄ら氷の薄きK ⑳四四七八・許己呂。／Kは疑ひもなし ④五三〇・情。⑫三〇二八・心。／Kの失する ⑪二四〇〇・心。／K消失せぬ ⑨一七四〇・情。

Kさへ消え失せれば ⑨一七八二・心。／Kうつくし ⑭三四九六・己許呂。

現しK ⑦一三四三(一云)・心。⑪二三七六・心。⑪二七九二・意。⑫二九六〇・情。⑫三二二一・心。うつろふK ⑫三〇五八・情。⑫三〇五九・情。／はねず色のうつろひやすきK ④六五七・意。⑫三〇七四・情。

うらさぶるK ①八二・情。／Kをうるはしみ ⑰三九六九・心。／うるはしとわが思ふK ④六八七・情。／Kを得る ⑦一三〇三・心。

おほろかのK ⑪二五三五・行。／<sup>おぞ</sup>K鈍く ⑫二八五六・心。／<sup>おや</sup>同じK ⑫二九二一・情。⑯三七九七・心。⑱四一八九・許己呂。／Kは同じ ⑫三〇九九・心。⑰三九七八・許己呂。

思ふK ④六八七・心。⑦一三三四・情。⑦一三八二・心。⑧一五四四・情。⑧一六一四・心。⑨一七九二・情。⑬三二五〇・心。⑭三四九六・己許呂。⑮三六二七・許己呂。⑮三七八五・許己呂。⑰三九五〇・意。

思ひしK ⑪二五七九・情。／思ひたるK ⑯三八〇〇・情。／思へりしK ③四八一・心。／K思ひて

⑳四四六五・己許呂。／Kには思ふ ⑪二三七一・心。⑪二五五二・情。⑱四一五四・心。／Kには思ひ ④一四・情。／Kに思ひて ⑦一二四五・情。／K思ほゆ ⑪二三九二・心。⑪二七五八・心。⑪二七七九・心。

⑮四〇九五・許己呂。／Kは思へど ④四九六・心。⑦一四〇一・心。⑪二五二二・心。⑪二六九九・意。⑫二九一〇・心（―には）。⑭三三六七・己許呂。／Kは思はじ ⑪二五三五・行。／K（を）思ふ ⑧一六五三・心。⑪二四七一・心。⑪二八一六・心。⑫二九〇二・情。⑫三〇五八・情 ⑫三〇七一・心。⑭三四八二・己許呂。⑭三五〇七・己許呂。⑮三五八八・情。⑮三七七五・己許呂。⑯三八〇七・心。⑰四四七八・許己呂。Kには思ひ誇りて ⑰四〇一一・情。／Kを：置く ⑯三八五一・心。／Kのうちを思ひ延べ ⑰四一五四・許己呂。／Kゆも思へ ④四九〇・情。／Kゆも思はぬ ④六〇一・情。④六〇九・情。⑤七九四・許己呂。⑦一三三八・心。⑦一三五四・心。／Kを近く思ほせ ⑮三七六四・許己呂。語らひしK ⑤七九四・許己呂。／K悲しく ⑮三六三九・許己呂。／K悲しも ③四五〇・情。⑯四二九二・情。／かぎろひのK ⑨一八〇四・心。／かり薦のK ⑬三二五五・心。K清隅の池 ⑬三二八九・情（掛け言葉）。／K競はへば ⑩二〇三三・神。／肝向かふK ②一三五・心。⑩一七九二・心。／Kを：極め尽して ⑰四四六五・許己呂。／Kは聞こえ来ぬ ⑧二六二四・心。Kぐぎ ⑧一四五〇・情。／Kぐし ⑰三九七三・己許呂。⑰三九七八・情。／Kぐみ ⑫三〇五七・意。／砕かむK ⑩二三〇八・情。／K砕けて ④七二〇・情。⑨一七九二・心。⑯三八一一・心。悔ゆべきK ③四三七・心。⑪二五二八・心。⑭三三六五・己許呂。／K苦し ⑨一八〇六・情。雲居なすK ③三七二・心。⑰四〇〇三・己許呂。異しきK ⑭三四八二・己許呂。⑮三五八八・情。⑮三七七五・己許呂。／Kもけやに ⑯三八七五・心。／うたて異にK ⑫二九四九・心。⑰四三〇七・許己呂。／Kを異には ⑪二三九九・心。／K：異に ⑬三三二八・情。

恋ふるK ④五八二・情。④七一六・情。④七二五・情。⑩二〇一六・心。⑪二七八五・心。⑬三二五八・心。／恋ひ来しK ⑦一二二一・心。／恋しきK ⑪三三九二・心。／Kのうちに恋ふ ④七〇五・情。⑨一七六八・

心。⑫二九四四・情。／K恋ふる ⑳四四四五・許己呂。／K恋しき ③二五三・心。／Kから：恋ふらく ④六九四・心。⑫三〇二五・情。⑬三二七一・心。

木屑なすK ⑪二七二四・心。／K言に出る ⑰四〇〇八・許己呂。

聴きK ⑫二九〇七・神。／さしまくるK ⑲四一六四・情。／さどはせる君がK ⑱四一〇六・許己呂。／寒水のK ⑯三八七五・心。／Kさまねし ①八二・情。／K寂しく ⑰三九六二・情。⑱

四一〇六・心。／K障らず ⑲四一六四・情。

下K ①五・情。⑦一三〇四・心。⑩一八八九・心。／下延ふるK ⑱四一一五・許己呂。／鹿のK

⑨一八〇四・意。⑩二〇九四・心。／K鎮める ②一九〇・心。⑤八一三・許己呂。／僂はせる君がK

⑰三九六九・心。／Kに染みて ④五六九・情。／しみにしK ⑥一〇四四・情。⑪二四九六・心。⑳四四

四五・許己呂。／K示す ④七二五・情。

緘結ひし妹がK ④五三〇・情。／K進む ③三八一・情

K「も」知らず ⑬三二五〇・心。⑭三五六六・許己呂。⑯四二九四・情。／Kを知らに ⑬三二五五・心。／

Kは知らゆ ⑯三八〇〇・情。／Kを知らむ ⑰三九五〇・意。／Kを知る ②九八・心。②九九・心。⑩一九

一六・情。

Kのすべもすべなさ ⑤七九六・許己呂。⑱四一〇六・許己呂。／Kは忍びかねつ ③四七二・情。

Kにしみて思ほゆ ④五六九・情。／Kもしるく ⑧一五九六・情

Kもしのに ③二六六・情。⑧一五五二・心。⑪二七七九・心。⑬三二五五・心。⑰三九七九・許己呂。⑰三

九九三・許己呂。⑰四〇〇三・許己呂。⑱四一四六・情。⑳四五〇〇・許己呂。

Kを塞かへる ⑦一三八三・情。⑪二四三二・心。／K背きて ⑤七九四・許己呂。／K空なり ⑪

二五四一・心。⑫二九五〇・情。／K天つ空なり ⑫二八八七・意。

激つK ⑦一三八三・情。⑪二四三二・心。／玉かづら絶えむのK ⑫三〇七一・心。⑭三五〇七・許己

許己呂。

呂。

たてまつ

奉るK

⑩二〇六九・情。

／ 憑みしK

③四八〇・心。

／ K違ふ

②一七六・情。⑨四二三六・情。

K足らひに

⑬四〇九四・心。

⑬四一二三・許己呂「己許呂」

情。

(天雲の) たゆたふK ⑪二八一六・心。／ たゆたひやすきK ⑫三〇三一・心。／ Kたゆたひ ④七二三・

Kにたぐひあらめやも

④五八二・情。

／ Kをぞ使いに遣りし

⑫二八七四・情

尽すK

⑬三二五一・心。／ Kつけずて

⑨四一六二・情。／ K尽す

⑧一六三三・情。

⑨四二二六・情。／

K尽して

④六八二・情。

⑨四一六四・情。

⑦一三二〇・心。

⑫三二六二・心。

⑨一八〇五(二云)・意。／ K

を尽さく ④六九二・情。／ Kつくしの山 ⑬三三三三・心。(掛け言葉)／ 奉へまつりしK ②一七六・情。

つつめりしK

⑬三二八五・心。／ Kつごく

⑬四〇八九・許己呂。／ Kつとむ

②〇四四六六・己許呂。

磨ぎしK ④六一九・情。

④六七三・心。

⑬三三二六・心。／ 遠きK ⑪二七〇一・心。／ 利K ⑪二四〇

〇・心。

⑫二八九四・心。

②〇四四七九・其己呂。／ Kどもなし

③四五七・心神。

③四七一・情神。

⑪二五二五・

情利。⑫三〇五五・心神。⑬三二七五・情利。⑪三九七二・許己呂度。⑨四一七三・情度。／ Kともしと思ふ

⑫二八四二・心。

Kは解けて

⑪三九四〇・許己呂。／ Kを解く

⑪二六〇二・心。／ Kも解けず

②一四四・情。

K遂げじと

⑦一三八二・心。／ Kは遂げず

③四八一・心。／ 泣きしK ②〇四三五六・許己呂。

長きK

⑦一四一三・心

⑧一五四八・意。／ Kは長く

⑥一〇四三・情。

Kなぐ

⑧一六二九・情。

⑪二五七九・情。⑬三六二七・許己呂。⑨四一五四・情。⑨四一八五・情。／ Kな

ぐさに

⑬四一〇一・心。

⑬四一〇四・許己呂。

⑬四一一三・情。

⑨四一八九・情。

⑨四一九〇・情。／ Kどの

和ぐ ⑨四一七三・情。

慰むるK

⑤八八九・許己呂。

⑤八九八・心。

⑬三三八〇・心。

⑪三九六九・許己呂。

⑬四一一三・許己呂。



⑬四一二五・許己呂。／慰もるK ②一九六・情。②二〇七・情。④五〇九・情。⑪二五七一・心。⑪二五九六・心。⑫二九〇四・心。／嘆くらむK ⑬四一〇一・心。

K無き ⑩二二二六・心(秋)。⑫三二二一・心(雨)。⑬三三四二・意(山)。⑮三七八四・許己呂(鳥)。／K無く ①一七・情。①七一・情。⑫二九〇四・心。⑭三四六三・己許呂。／K無し ⑫二九〇七・神。⑫二九六〇・情。／Kし無くは ⑬四一一三・許己呂。⑬四一一五・許己呂。／Kは無しに ⑥九三五・情。⑩二二二・心。⑪二三七六・心。⑪二五九六・心。／(あな)Kな(と) ⑩二三〇二・情。

何Kぞも ⑩二二九五・情。／何のKぞ ⑭三九一二・情。／Kからなつかしみ思ふ ⑦一三〇五・心。

靡き藻のK ⑪二七八〇・情。／打ち靡くK ⑭三九九三・許己呂。／打ち靡きKは ④五〇五・情。⑪二七七九・心。⑬三二六六・情。⑬三二六七・情。／後のK ②九八・心。②九九・心。

乗りにしK ⑦一三九八・意。⑦一三九九・情。／Kに乗る ②一〇〇・情。④六九一・情。⑩一八九六・心。⑪二四二七・心。⑪二七四八・心。⑪二七四九・情。⑫三二七四・心。⑬三二七八・心。⑭三四六六・己許呂(の緒ろに)。⑭三五一七・許己呂。

K告れ ⑭三四二五・己許呂。／K延べむ ⑩一八八二・意。

春雨のK ⑩一九一六・情。／K引き ⑭三三三六・己許呂。⑭四二四八・心。／K開けて ⑧一六六一・心。／紐の緒のK ⑫二九七七・心。／太きK ②一九〇・心。／K二行く ⑭三三二六・己許呂。

K深めて ⑦一三八一・心。／Kも深く ⑪二四六九・心。

K振り起し ③四七八・心。⑭三九六二・情。②四三九八・情。

K隔てつ ⑬四〇七六・許己呂。／K隔てや ⑦一三一〇・心。／外K ⑪二四三四・心。

ますらをK ⑪二七五八・心。／ますらをのK ③四七八・心。⑩二二二二・心。⑭三九六二・情。⑬四〇九五・許己呂。②四三三一・許己呂。②四三九八・情。／Kさへ奉れる ⑪二五七三・情。／Kを奉る ⑪

二六〇三・心。／待つらむK ⑬四一〇七・許己呂。／待たすらむK ⑭三九六二・情。⑬四一〇六・心。

- ／ K 待て ⑬三三〇七・情。⑬三三〇九・心。／ 松が根の君が K ⑫三〇四七・心。  
 惑へる K ④六七一・情。／ K 惑ひぬ ④六三八・心。⑫二九五五・情。⑫二九六一・心。  
 K は守り敢へぬ ⑪二六五七・心。／ K は：君がまにまに ⑬三三八五・心。  
 御 K ①三六・心。③四七八・心。⑤八一三・許さ呂。⑮四〇九四・心。／ K 誰に見せむ ⑮四〇七〇・  
 許己呂。／ K は夢に見えきや ④七一一六・情。／ 見し K ⑪二五二二・心。／ K を見し明らめし ③四七八・心。  
 朝霧の乱るる K ⑮四〇〇八・許己呂。／ K 乱れて ⑨一八〇五・心。  
 結びし K ③三九七・情。／ 結びてし K ⑪二六〇二・心。／ K と結びてし ⑮三七九七・心。／ 松が枝を結  
 ぶ K ⑥一〇四三・情。  
 K 咽せつつ ③四五三・情。／ K のみ咽せつつ ④五四六・情。／ K に咽せむ ④六四五・心。  
 紫の K ④五六九・情。／ むらきもの K ①五・心。④七二〇・情。⑩二〇九二・心。⑮三八一・心。  
 K 燃えつつ ⑨一八〇四・心。／ K は燃えぬ ⑤八九七・心。⑮三九六一・情。／ K には燃えて ⑫二九三二・  
 情。／ K のうちに燃えつつ ④七一八・心。／ K には火さへ燃えつつ ⑮四〇一一・心。  
 持てる K ⑪二五三七・心。／ K 持つ ⑫三〇五九・情。／ K に持つ ⑮三七二三・許さ呂。／ K を持て  
 ⑬三二八〇・心。②四三三一・許己呂。／ K は持たじ(ず) ③四三七・心。④六一九・意。⑩二三〇八・情。  
 ⑪二五二八・心。⑭三三六五・己許呂。／ 百重なす K ④四九六・心。⑫二九〇二・情。  
 八十の K ⑬三二七六・心。／ K 安き空 ⑨一七九二・情。／ K のうちは止む ⑪二七八五・心。  
 K 焼く ⑦一三三六・情。⑬三二七一・情。／ K 休めむ ⑫二九〇八・心。／ 山人の K ②四二九四・情。  
 K 遣る ⑪二四五二・意。⑫二八四五・意。⑮三九九一・許己呂。⑮四一八七・情。／ K を遣る ③三四六・  
 情。／ K をぞ使いに遣りし ⑫二八七四・情。／ K のみ妹がり遣りて ⑭三三三八・己許呂。  
 K し行けば ④五五三・情。⑮三九八一・許己呂。／ K も行かず ③四六六・情。／ K には緩ふ ⑮四〇  
 一五・情。／ 汝が K ゆめ ⑦一三五六・情。⑪二五一・心。⑬三三〇五・心。／ K 縦す ④六一九・

情。④六七三・心。

淀まむ K ⑫三〇一九・心。／恋の淀める K ⑪二七二一・情。／ K よし ⑩一八八九・心。

K は寄る ④五〇五・情。④五四七・心。⑩二二四二・心。⑪二四八二・心。⑪二七二四・心。⑪二七八〇・情。⑫二九八五別歌・心。⑫二九八六・心。⑮三七五七・許己呂。／（打ち靡き）K は寄る ⑬三二六六・情。

⑬三二六七・情。／K 寄せむ ③四八〇・心。

海神わたなめの K ⑦一三〇三・心。／別くこと難き K ⑩二一七一・情。

K 忘れめや ⑪二四九六・心。／K さへ：忘れる ④七七〇・情。／K には忘れぬ ④六五三・情。／K には

忘るる日なく ④六四七・心。／K は忘らゆ ⑫四四八二・許己呂。／K は忘れせぬ ⑫四三五四・己呂。／

K（は・し）忘れかねつも ③三九七・情。⑦一三九九・情。⑫三〇四七・心。⑬三八五七・情。／K を忘らえ

ぬかも ⑫四三五六・許己呂。／K を忘れて思へや ④五〇二・心。／K も常忘らえず ⑦一三九八・意。⑬三

二九〇・心。

雄 K ⑫二八七五・心。／K 惜をしけくもなし ⑬三二五一・心。

\*

『萬葉集』で、「こころ」が如何なる形容詞を伴い、どのような叙述がなされるか、を拾い出して、現代の通常の表記に統一して列挙してみた。

「こころ」とは、「有」ったり「無」かったり、「持」つか否か、「知」ったり「忘」れたり、「思」い、「恋」うるもの、「浅」かったり「深」かったり、「長」いもの「太」いもの「遠」いものがあり、「痛」み「悲」しみ「苦」しむもの、「（消え）失」せたり「碎」けたり「尽」したり、「和」いんだり「待」ったり「遣」るもの、「燃」え「焼」け、「結」び「解」け「寄」り、「靡」くもの、「同」か「異」か、「足」るか否かが問題になるもの、「移」

ろい「惑」い「乱」れ「淀」み「咽」せるもの、「紫」が染みて思われ、「はねず色」のように移ろいやすく、「紅に深く染」みるもの、等々、『萬葉集』の中で姿が様々に判る。上記の抽出が、それらの詳細及びその他の今後の考察の資料としての意味が幾らかでもあれば、ここではよしとしたい。「こころ」の表記について、何らかの規則性や法則のようなものはまずない、と言いつてよからう。例えば、「摧く」と結びつく時には「心」、「痛き」と繋がる場合には「情」とでもなっていればともかく、そのようなことはないのである。「心・摧けて」⑨一七九二、「摧かむ情」⑩一三〇八、「心の痛き」⑬三二五〇、「意の痛き」⑬三三二九、といった具合なのだから。現代の感覚では、新鮮に響く「こころ」も少なくないが、集中十二回出てくる「こころに乗る」という表現は特に注目に値いしよう。

- 一、東人の荷前の箱の荷の緒にも妹は情に乗りにけるかも ②一〇〇
- 二、もしきの大宮人はさはにあれど情に乗りて思ほゆる妹 ④六九一
- 三、楽浪の志賀津の浦の船乗りによりにし意常忘らえず ⑦一三九八
- 四、百伝ふ八十の島廻を漕ぐ船に乗りにし情忘れかねつも ⑦一三九九
- 五、春さればしだり柳のとををにも妹は心に乗りにけるかも ⑩一八九六
- 六、宇治川の瀬々のしき波しくしくに妹は心に乗りにけるかも ⑪二四二七
- 七、大船に葦荷刈り積みしみみにも妹は心に乗りにけるかも ⑪二七四八
- 八、駅路に引き舟渡し直乗りには妹は情に乗りにけるかも ⑪二七四九
- 九、漁りする海人の楫音ゆくらかに妹は心に乗りにけるかも ⑫三一七四
- 十、赤駒を 厩に立て 黒駒を 厩に立てて そを飼ひ 吾が行くがごと 思ひ妻 心に乗りて 高山の 峰のたをりに 射目立てて 鹿猪待つがごと 床敷きて 吾が待つ君を 犬な吠えそね ⑬三二七八
- 十一、ま愛しみ寝れば言に出さ寝なへば已許呂の緒ろに乗りて愛しも ⑭三四六六

十二、白雲の絶えにし妹をあぜせろと許己呂に乗りてここば愛しけ ⑭三五一七

「こころ」の表記がこの場合も五通りもある。この十二例、全て、心に乗るのは女性であり、心に乗られるのは男性である。第十例以外は全て男の作品である。唯一女性の作品であるこの長歌は、殊の他の秀作であろう。栗毛馬を、黒馬を既に大切に飼育してそれに私が乗ってゆくように、可愛い妻が私の心に乗って心を占めてしまつてね、などと言つてくださるあなたを、私は高い山の峰の窪に獣を狙い射る場所を作つて待ち伏せるように寢床を整えて待つているのですから、私が待ちに待つているその夫を、犬よ、吠えたりしないでね、というのである。夫婦双方の愛情が、具体的な譬喩によるイメージで活写されているばかりか、当時の社会状況もよく判る作品である。犬は実際にも山野に多く生息したのであるが、第十一例の作中の「言に出」なども示すように、二人の愛情をあれこれ取り沙汰する口さがない近所の人々の寓喩でもあらう。

「思ひ妻」などという新鮮な響きの語とも相俟つてこの作品は、男性の「心に乗る」萬葉時代の女性たちへの思いを掻き立ててやまない。『萬葉集』に登場する「妹」、特に「つま」たちを次に垣間見てみたい。

## (二)

『萬葉集』で、「つま」「め」と訓まれる男女の配偶者を指す表記は、次の十一通りである。出てくる順に、A、Kの記号を付して表に示してみよう。「つま」の場合も、表記の違いに何か意味があるのか否か気にかかるが、結論を言つてしまえば、「こころ」の場合同様、殆ど法則性・規則のようなものは見当たらない、と言う方が安全であろう。後に触れるように、若干、恣意的に觀察の結果を、もっともらしく言うことは出来ようが、余り意味はなさそうである。

豆末	嬬	嬬
K	F	A
1	15	34
(一云の(A)は総計の中に含まないでおく)	計240	妻
	都末	
	G	B
	4	140
	嬬	夫
	H	C
	1	4
	豆麻	都摩
	I	D
	8	1
	追麻	都麻
	J	E
	1	31

(二云の(A)は総計の中に含まないで置く

卷	歌番号	表	現
一	一三 二一 五九	嬌を争ふ 人嬌 妻吹く風	つま
一	●八四	妻恋ひ	つま
二	後九〇 前二一 一三五	雄朝嬌 妻に別れて 嬌隠る	つま
二	一三八 前四〇 一五三	吾が嬌の兒 人麻呂が妻 若草の嬌	つま
二	一九四 一九六	嬌の命の 片恋ひ嬌	つま
二	二二〇	嬌屋の内に	つま
二	二二三	嬌屋の内に	つま
二	二二七	若草のその嬌	つま
二	二三〇	妻知らば	つま
二	ク	愛しき妻ら	つま
二	三	妻もあらば	つま
二	●二五七 ●二六〇 ●二六八	鴨妻喚はひ 鴨妻喚はひ 嶋待ちかねて	つま
二	前二八一 四二六	黒人が妻の 誰が嬌か	つま
二	四三一	妻問ひ	つま
二	四四三	妻に子等に	つま
二	前四八一 四八一	死にし妻を さ寝し妻屋	つま
二	前五〇〇 前五〇四	妻の作る歌 人麻呂が妻	つま
二	前五一	大夫が妻	つま
二	五二七	人妻	つま
二	五三四	遠婦	つま
二	五四三	愛し夫	つま
二	五四六	白妻	つま
二	五八五	妻恋ひ	つま
二	前六一 六三四 六三五	東人が妻 旅にも妻と 旅には嬌は	つま
二	六三七	嬌問ひに	つま
二	前六四三 六六三	王が妻 愛しき妻	つま
二	七九五	都摩夜	つま
二	前八〇〇 八〇〇	妻子を顧みず 妻子見れば	つま
二	八七一 八九二	都麻恋ひに 妻子どもは	つま
二	ク	妻子どもは	つま
二	●九二〇 九五二	かはづ都麻 嶋待つに	つま
二	後二〇二七 二〇四七	妻苑臣に 妻呼び響む	つま
二	一〇五〇 一〇五三 一〇六二	妻呼び響め 妻呼ぶ秋は 千鳥妻呼ぶ	つま
二	一〇六四	白鶴の妻呼ぶ	つま
二	●一二二五 一二二九	千鳥妻喚び 嬌や匿れる	つま
二	●一二二 一二六五	妻唱び立てて 己妻喚ばふ	つま
二	●一二九八 一二五七	自妻喚ぶも 妻といふべし	つま
二	一二六二	齋ひ嬌	つま
二	一二七八	房の下に	つま
二	一二八五	若草の嬌	つま
二	一二九四	遠妻	つま
二	●一四四六 一四五三	妻恋ひに 鶴が妻喚ぶ	つま
二	後一四七二	大伴卿が妻	つま

九										八									
一七四六	一七四五	一七四二	一七三八	一六八六	一六八六	一六八六	一六八六	一六八六	一六八六	一六二九	一六二九	一六二九	一六二九	一六二九	一六二九	一六二九	一六二九	一六二九	一六二九
B	B	C	B	A	(A)	(A)	B	B	B	A	G*	B	B	B	A	A	A	(A)	A
遠妻し	妻もが	若草の夫	己妻離れて	嬌恋ひに	嬌と言ひ	嬌賜はにも	妻と言ひ	妻寄しこせね	妻の社	誰が妻	嬌問ひす	吾が情都末	妻に恋ふ	妻恋ひに	妻恋ひに	嬌呼ぶ音を	嬌呼ぶ音を	嬌迎へ船	遠嬌の
十										九									
二〇一一	二〇〇六	二〇〇五	二〇〇四	二〇〇二	一九九九	一九九八	一九三八	一九三七	一八二六	一八一八	一八一七	一八〇二	一八〇一	一八〇〇	一七九〇	一七九〇	一七九〇	一七六一	一七五九
F	F	F	F*	F	B	A*	B	E	B	B	B	B	B	B	A*	B	B	B	B
嬌問ふまで	嘆かす嬌に	自が嬌	己嬌に	乏し嬌	人妻故に	嬌は知れる	妻恋ひす	都麻恋ひす	妻を求むと	朝妻の	旦妻山に	妻問ひし	妻問ひし	妻をも見む	嬌待つ木の	妻問ふ	妻が和ふる	妻に与ふる	他と妻に
十二										十一									
二一八九	二一八八	二一七八	二一七五	二一六五	二一五三	二一五一	二一五〇	二一四九	二一四八	二一四二	二一四一	二一三一	二一三〇	二〇九八	二〇九〇	二〇八九	二〇八六	二〇七五	二〇二二
B	B	B	B	B	A	B	B	B	B	B	B	B	C	B	B	A	A	B	H
妻梨の木は	妻梨の木を	妻隠る	妻まかむ	かはづ妻呼ぶ	嬌問ひし	妻呼ぶ音は	妻恋ひす	妻が眼を	妻呼ぶ音を	妻整ふ	妻呼ぶ雄鹿	妻問ふ時に	妻問ふ秋の	妻問ふ夕ぞ	その夫の子	稚草の妻が手	妻恋ひに	嬌喚ぶ舟の	遠妻の手を
十一										十									
三〇一四	二九〇九	二八六六	二八〇三	二七六一	二七〇八	二六五六	二六五一	二五六六	二五六二	二五〇九	二四九七	二四八〇	二四二八	二三七一	二三六五	二三六一	二三五四	二三五三	●二二二〇
B	B	B	B	B	B	A	B	B	B	F	F	F	F	F	B	B	B	B	B
後も吾が妻	人妻に	人妻に	隠り妻はも	吾が念ひ妻	内り妻はも	隠り嬌ぞも	己が妻こそ	隠り妻はも	言縁せ妻を	隠りたる嬌	嬌と持ませ	我が恋ひ嬌	我が嬌	吾が恋ひ嬌	人妻ゆゑに	稚草の妻	隠せるその妻	隠せる妻	妻喚ぶ山

●三〇九一	B	己が妻どち	後三三四五	B	防人の妻	●三六五	妻子が産業	●四三一九	E	都麻呼ぶ	二十
三〇九三	B	人妻ゆゑに	三三四六	B	妻離くべし	後三八六九	妻子ども	四三二二	E	我が都麻は	
三一五	B	人妻なりと	三三四七	B	妻放かり	〃	妻子が傷み	四三二七	E	我が都麻も	
三二五六	B	越えむ妻も	三三七〇	I	花つ豆麻	三八七三	我が一夜妻	四三三一	E	若草の都麻	
十三	E	隠り都麻	三三四四	E*	都麻寄しこせね	三九六二	都麻の命も	〃	E	愛しき都麻	
三二六六	B	愛し妻と	三四七二	I	人豆麻	三九七八	我が奥豆麻	四三三二	E	嘆きけむ都麻	
三二七六	B	思ひ妻	三五〇二	I	我が目豆麻	●三九九三	都麻呼び交す	四三三三	E	都麻別れ	
三二七八	F	吾が嬬	三五一二	E	寄そり都麻	●四〇〇六	都麻呼ぶと	四三三三	●	我が美愛しも	
三二九五	B	語らふ妻を	三五三九	I	人豆麻	四〇一八	都麻呼び交し	四三八五	E	都麻をと	
三二九九	B	都麻と言はじ	三五四一	I	人豆麻	四〇一	都麻の命の	四三九七	E	誰が都麻	
三三〇一	E	愛し妻は	三五五七	E	人豆麻	前四〇一六	両妻例に	四三九八	E	都麻別れ	
三三〇三	B*	妻は含ひき	三五七一	I	己豆麻	〃	妻有りて	〃	E	若草の都麻	
〃	B*	妻し有れば	三五九六	E	印南都麻	四一〇六	妻子見れば	四四〇八	E	若草の都麻	
三三一	B	隠り嬬かも	●三六二五	E	都麻と	〃	都末の子と	〃	E	石前が妻の	
三三一二	G*	人妻末の	後三六二六	B	亡き妻を	前四二一〇	先妻	後四四一三	B	妻の椋椅部	
三三一四	C	己夫し	●三六七八	J	追麻思ひ	四二二三	花豆末	後四四一六	B	荒虫が妻の	
〃	F	嬬にし有り	三六九一	G	都末らも	四二二七	都麻問ひの	後四四一七	B	妻の椋椅部	
三三三〇	B	若藪の妻	三六九二	E	都麻も子供も	四二四八	隠り豆麻	後四四二〇	B	妻の椋椅部	
三三三六	B	妻も子ども	三七九一	B	妻問ふと	四二五四	都麻屋の	後四四二二	B	妻の物部	
三三三七	B	稚草の妻も	三八〇八	B	己妻すらを	四二二一	婦問ひ	後四四二四	B	都司が妻女	
三三三九	B	母父も妻も	後三八〇八	B	妻を愛す	前四三三六	死にし妻を	前四四四〇	B	朝臣が妻	
三三四二	B	待つらむ妻	後三八一〇	B	他妻を取り	四三三六	吾が妻離る	後四四九一	B		



『萬葉集』では、男女を問わず配偶者を共に「つま」と呼ぶのは公平で結構だが、男の方を表わすのに「夫」は四回使われるだけで、他の十六回は「婦」「妻」「嬬」などを悠然と使用する。前表の「つま」欄の\*印はそれら男の方、「夫」を指すものである。

⑥印を付した⑥九五二の「婦」は、男女いずれの配偶者をも指すもの。この作品と、③二六八との「嶋」は、原文は「嶋」であるが「婦」の誤字説に依っていることを示す。誤字説といえは⑬三二九九の「妻」は、「益」の誤字ではないか、との説もあり、この作品の結句は難解とされているのは周知の通り。

歌番号の上の「●」印は、鹿や雁、鴨など動物の「つま」であることを示すが、③二六八、⑧一五四一、⑧一五六一、⑧一五六二、⑧一六二九、⑩二一五三、が「婦」である以外は、全て「妻」である。

左注や詞書など、詩歌以外の文章中に表われる「つま」「め」は、允恭天皇の諡の中の「雄朝婦」(②後九〇)以外は、全て「妻」である。

②四三三は、「メ」の訛りの「ミ」がそのまま表わされて、「妻」ではなく「美」が使われている。

「つま屋」(母屋の横に建てられた離れの建物で、新婚夫婦用の家屋とも言われる)は集中六回現われるが、②二一〇(A)、②二二三(A)、③四八一(B)、⑤七九五(D)、⑬四一五四(E)の他もう一回の、⑦一二七八は、「房」一字を「つま屋」として使っていて、「つま」に相当する文字を用いていない。

配偶者を若草の瑞々しさに譬える「つま」の枕詞「若草の」が妻(夫)と結び付いて使われるのは十一例あるが、「若」には「稚」「穉」「葛」の変化が見られる(表音式表記は今では問題にしない)。

若草の夫——②二五三(A)、②二二七(A)、⑨二七四二(C)。

若草の妻——⑦一二八五(F)、⑩二〇八九(B)「稚」、⑪二三六一(B)「穉」、⑬三三三六(B)「葛」、⑬三三三九(B)「稚」、②〇四三三(E)、②〇四三九八(E)、②〇四四〇八(E)。

種々の「つま」が現われて興味深いのでそれを一瞥してみたい。女を「妻」、男を「夫」に統一して、原文の文字は先刻来の表で用いた記号で示す。「人妻」と「己妻」が多く現われるのは当然であろう。

人妻（他人の配偶者・既婚者）——①二一（A）。④五一七、⑨一七五九、⑩一九九九、⑩二二九七、⑪二三六五、⑫二八六六、⑫二九〇九、⑫三〇九三、⑫三一五（以上B）。⑭三四七二、⑭三五三九、⑭三五四一（以上I）。⑭三五五七（E）。①二一は天皇の「つま」で「孀」が用いられているが、その他は表意式は全て「妻」であり、「ひと」も、⑨一七五九の「他」以外は、全て「人」である（卷十四の「ひと」は表音式）。

人夫——⑬三三二四（G）。これ一回のみ。「人妻」も「人夫」も卷十五以降の卷には現われない。

己妻——④五四六「自」、⑦一一九八「自」、⑨一七三八、⑭三五七一（I）、⑯三八〇八。卷十四の例以外は全て（B）。

己が妻——⑩二〇〇五（F）「自」。⑪二六五一、⑫三〇九一、⑦一一六五、以上三例全て（B）。尚、この最後の例、⑦一一六五の「己妻喚」（おのがつまよぶ）は、（おのづまよばふ「ぶも」）の訓もあるので、そう訓めば「おのづま」の例となる。

己夫——⑩二〇〇四（F）、⑬三三一四（C）。尚、「己」には「自」が使っている場合を「」で示した。

我が妻——②一三八（A）「吾」、⑨一七五九（B）「吾」、⑪二四二八（F）、⑫三〇一四（B）「吾」、⑬三二九五（F）「吾」、⑭四三三二（E）「和我」、⑭四三三七（E）「和我」。「我が妻」の訛りで⑭四三三三「和加美」があることは既に触れた。

以下、五十音順に種々の「つま」を取り上げてみよう。

朝妻（早朝帰ってゆく男を見送る妻）——⑩一八一七、一八一八（共にB）。地名「朝妻（山）」との掛け言葉で使われている。

斎ひ妻（夫のために潔斎してその無事を祈っている妻）——⑦一二六二（A）。

愛し妻——⑬三二七六（B）。《波雲の》愛し妻。形の良い波雲のように見飽きない慕わしい妻。

愛し夫——④五四三（C）、⑬三三〇三（B）。

奥妻（心の奥深くに思う妻）——⑦三九七八（I）。

思ひ妻（愛する妻）——⑪二七六一（B）「念」、⑬三二七八（B）。「おもひ」には「念」が断然多い。

片恋ひ夫——②一九六（A）。一人残されて一方的に片思いしている夫君忍壁皇子を指している。

心夫（心の中で密かに愛し思っている人）——⑧一六一（G）。女性、笠縫女王の歌なのでこの相手は男。

言寄せ妻（いい仲だとその関係を評判立てられている妻）——⑪二五六二（B）。

恋ひ妻——⑪二三七一（F）、⑪二四八〇（F）。これに関連した表現、「妻恋ひ」①八四（B）、④五八五（B）、

⑧一四四六（B）、⑧二六〇〇（B）、⑧一六〇二（B）、⑨一六八六（A）、⑩一九三七（E）、⑩一九三八（B）、

⑩二〇八九（B）、⑩二二五〇（B）、「夫恋ひ」⑤八七一（E）がある。

隠り妻（通ってくる夫が自分との関係を未だ世間に公表してくれていない妻、人目を忍んで逢う仲の妻）——

⑩二二八五（A）、⑪二五六六（B）、⑪二六五六（A）、⑪二七〇八（B）「内り」、⑪二八〇三（B）、⑬三二六

六（E）、⑬三三二一（F）、⑬四一四八（I）「己母利」。類似のものに、「隠りたる妻」⑪二五〇九（F）、「隠

せる妻」（親の許しを得ずに担ぎ出し、人目につかない所に隠し置いてある妻）⑪二三五三（B）、⑪二三五四（B）

があり、「妻や隠れる」⑦一二二九（A）「匿」、「妻隠る」②一三五（A）、⑩二二七八（B）、の表現が見られる。

遠妻（遠くに離れて住んでいる妻）——④五三四（A）、⑦二二九四（B）、⑧一五二一（A）、⑨一七四六（B）、

⑩二〇二一（H）……この原文は底本は「遥嫗」であるが、「嫗」は老婆のさまを意味する字であり、元暦校本な

どで用いられている「嫗」は醜女を指す字なので、共に誤字の可能性が大きいから『玉台新詠』に美貌を表す字

として使われている「嫗」が、原文の文字だったと見なそうとする説がある（小）。感銘深い卓説だと思うが、

しかし果してそこまで漢字の原義を意識した文字使いを表記者はしているのであろうか。

乏し妻（逢うことが極めて稀な妻）——⑩二〇〇二（F）。

嘆かす妻（逢い難いことを嘆いている妻）——⑩二〇〇六（F）。ここでは織女星を指している。

愛し妻（可愛いという妻）——⑧一五二一（A）、の「遠婦」の別の句として用いられるもの。これに関連

して「愛しき妻」②二二〇（B）、④六六三（B）、②〇四三三（E）、がある。

花妻（花のように美しい妻）——⑧一五四一（A）、⑩四一二三（K）。

花つ妻（花のように美しいが抱いて寝られない妻？）——⑭三三七〇（I）。

「我が岡にさ雄鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴くさ雄鹿」⑧一五四一、の「花妻」は、萩の花を鹿の妻と見做して初萩の花を妻問おうとして、と表現したもの。

一夜夫（ただ一夜を共にした、一夜契りを結んだのみの相手の男）——⑯三八七三（B）。男を表わすのに原文は平然と「妻」を用いている。

目妻（眼で見て愛するだけの妻）——⑭三五〇二（I）。

寄そり妻（世間の人から噂を立てられてゐる妻。密かに心を寄せてゐるのだと噂されている妻）——⑭三五一二（E）。この作品、「一嶺ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ雲の寄そり妻はも」は、「一つ山の（一緒に寝ている）仲だと言われているながら私が寝ようよ（吾を寝ろ）と言うとその言葉に青嶺ろにためらつて漂っている雲のような噂だけの妻よ、今どうしているのだろう」というもので、掛け言葉と譬喩とを巧みに交錯使用して、集中唯一度しか現われない「寄そり妻」などという造語？と共に、秀吟であろう。

掛け言葉といえ、前述した「朝妻（山）」の他に、地名「印南つま」とのそれがある。⑮三五九六（E）。他に次の例がある。

夫松（待つ）——⑥九五二（A）、⑨二七九五（A）。前者の原文「嶋」は「孀」の誤りだとする佐竹昭広説に依る（小）。松待つ、の掛け言葉には「吾が松」⑩一九二二、「君松の樹」⑥一〇四一、などがある。

妻梨（無し）——⑩二一八八、二一八九（共にB）。

誰の配偶者か、と問ふ「誰が夫」③四二二六（A）、「誰が妻」⑨一六七二（B）、⑳四三九七（E）がある。「つま」はどうするか、「恋ふ」（前述）以外を一瞥してみよう。

妻離く——⑬三三四六（B）。妻放かり——⑬三三四七（B）。

夫は知れる——⑩一九九八（A）。この「つま」は織女星が彦星を指している。

妻整ふ（妻を呼び集め並べる）——⑩二二四二（B）。雄鹿が鳴くのである。

妻問ひ——③四三一（B）、④六三七（A）、⑧二五四一（花妻、A）、⑧一六二九（A）、⑨一八〇一（B）、

⑨一八〇二（B）、⑩二二五三（A）。

妻問ふ——⑨一七九〇（B）、⑩二〇一一（F）、⑩二〇九〇（B）、⑩二〇九八（B）、⑩二二三一（B）、⑩三七九一（B）。

妻まかむ（妻と寝よう）——⑩二二六五（B）。

妻を求む——⑩一八二六（B）。

妻寄しこせね（妻を授けたまえ）——⑨一六七九（B）。夫寄しこせね——⑭三四五四（E）。前者は「妻の社」なる神社に、後者は「麻手小衾」（麻の布団）に、寄びかけ、語りかけている。妻と夫が一例ずつあるのが面白い。尚、⑨一六七九、「紀伊の国に止まず通はむ妻の社妻寄しこせね妻と言ひながら」は（一に云ふ「妻賜はにも妻と言ひながら」の場合も）短歌一首中に三回「妻」が使われる集中唯一の例である。

妻呼ぶ——⑥一〇五三、一〇六二、一〇六四（以上、イ・B）。⑦一二二五（ロ・B）、⑧一四五三（ロ・B）。

⑧一五六一、一五六二（以上、イ・A）。⑩二〇七五、二〇八六（以上、ロ・A）。⑩二二四一、二二四八、二二五一、二二六五（以上、イ・B）。⑩二二二〇（ロ・B）、⑭四〇〇六（E）、⑳四三二九（E）。この「妻呼ぶ」は、\*印の二作品（彦星が妻を呼ぶ）以外は全て、鹿や鴨、かはすなどの動物が主人公である。尚、「よぶ」には原文では「呼」（イ）と「喚」（ロ）の二字があることを記号で示しておいた。表音式は本稿の常で今は問わな

い。

妻呼び交はす——⑭三九九三（E）、⑭四〇一八（E）。共に動物が主語。

妻唱び立てて——⑦一一六二（B）。呼ぶのは洲鳥。

妻呼びとよむ——⑥一〇四七（イ・B）。妻呼びとよめ——⑥一〇五〇（イ・B）。呼ぶのは共に雄鹿。

妻別れ——⑳四三三三、四三九八（共にE）。

\*

「つま」を表わす文字は、通常は「妻」(B)を用いており、動物の「つま」は、極く少数の例外(それも、作者が身分の高い人物が殆ど)を除くと全て「妻」であること、概して、身分の高い作者の作品や、身分の高い人物を指す場合、七夕伝説中の織女星、彦星を指す時は、「婦」(A)、「嬬」(F)を用いる傾向にあること、などが観察されよう。既に一言したが、男の方を表わす「夫」(C)は集中で四回使われるものの、「夫」を表わすのに、文字の一部に「女」の付くA・B・F・H、を悠然と使って、男女の区別にはまず意を用いていないことが、判る。

「人妻(夫)」や「我が妻」「己が妻」は勿論、「己妻(夫)」や「恋ひ妻」辺りまでなら現代でもそれ程特別には響かないが、「隠り妻」や「遠妻」は新鮮な語として迫る佳句である。まして、集中、殆ど一例ずつしか現われない「朝妻」「斎妻」「愛し妻(夫)」「奥妻」「思ひ妻」「片恋ひ夫」「心夫」「言寄せ妻」「乏し妻」「愛し妻」「花妻」「花つ妻」「一夜夫」「目妻」「寄そり妻」の目新しさには、現代の我々は思わず心惹かれて、これらの「つま」たちに「心に乗」られてしまいそうだ。

鮮烈な語彙と言えば、「妻迎へ船」⑧一五二七(A)には瞠目させられよう。『萬葉集』の七夕の歌も「日本の妻問ひの習慣に合わせて、大半が牽牛が織女の方に逢いにゆく」設定だが「これはその折衷形式」(小)で、彦星が織女を自分の方へ呼び寄せるために船を仕立てて迎えに出すその船の謂である。こういう船には織女ならずとも妻はいそいそと乗り込むだろうし、そういう夫に「心に乗」られてしまうに違いない。

斎藤茂吉の第一歌集『赤光』の、次の諸作

をさな妻をとめてなりて幾百日こよひも最早眠りゐるらむ

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時たちにけり

をさな妻こころに持ちてあり経れば赤き蜻蛉の飛ぶもかなしも

公園に支那のをとめを見るゆゑに幼な妻もつこの身愛しけれ

をさな妻をさなきままにその目より涙ながれて行きにけるかも

をさな妻ほのかに守る心さへ熱病みしより細りたるなれ

をさな妻こころに守り更けしづむ燈火の虫を殺してゐたり

の「をさな妻」「幼な妻」は、純然たる茂吉の《造語》か否かはともかく、これら秀歌、特に二首目の秀吟によって脚光を溢びて登場した語彙と言つてよく、この語を産みだし使用した語感とは、『萬葉集』の前記の新鮮な「つま」たちに触発されたのではないかと本稿の筆者は密かに考へている。年令の遥かに離れた年下の、初々しく瑞々しい乙女乙女した感じの若い妻を指して、この「幼な妻」は間然する所のない美事な語で、今もあり続けている。本稿はもしかすると、この語彙の源泉を探しての、『萬葉集』の《こころ》と《つま》たちの観察だったのかも知れない。そう言えば、茂吉も、その短歌作品中に、頻りに「こころ」なる語を種々に用いている。そう思つて彼の最初の歌集『赤光』全八三四首中、「こころ」なる語が使われている作品を調べたらその数六五首、『赤光』全作中に占めるその割合は、七・八%弱であり、先刻述べたように『萬葉集』で「こころ」が使用される作品の全巻での割合七・六%強と、何と！殆ど同じであつた。

# 注

1. 次の略記である。並びに本稿での主たる参照文献。

(藍) 藍紙本。(壬) 伝壬生隆祐筆本。(類) 類聚古集。(紀) 紀州本。(元) 元暦校本。(古義) 萬葉集古義。

萬葉集評釋 窪田空穂 十二冊 東京堂・昭一八・二七／補訂版 七冊 角川書店(窪田空穂全集)・昭四

一〇二

- (全註) 萬葉集全註釋 武田祐吉 十六冊 改造社・昭二三／六／増訂版 十四冊 角川書店・昭三一／二
- (私註) 萬葉集私注 土屋文明 二十冊 筑摩書房・昭二四／三一／新訂版 十冊 昭五一／二
- (岩) 萬葉集(日本古典文学大系) 高木市之助・五味智英・大野晋 四冊 岩波書店・昭三二／七
- (注釈) 萬葉集注釋 澤瀉久孝 二十冊 中央公論社・昭三二／四三
- (小) 萬葉集(新日本古典文学全集) 小島憲之・木下正俊・東野治之 四冊 小学館・一九九四／九六
- (新) 萬葉集(日本古典集成) 青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎 五冊 新潮社・昭五一／九
- 萬葉集(完) 日本古典 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 六冊 小学館・昭五七／六二
- (新校) 新校萬葉集 澤瀉久孝・佐伯梅友 創元社・昭四七
- (塙) 萬葉集・本文篇 佐竹昭広・木下正俊・小島憲之 塙書房・昭三八
- (桜) 萬葉集 鶴久・森山隆編 桜楓社・昭五九
- (角) 萬葉集 上・下 伊藤博校注 角川文庫・昭六〇
2. 幸田露伴「王義之」
3. 前半は男性の、後半は女性の、作品が合体していると見るのが現行の大方の解釈のようである。しかし筆者はそうは看做さない。
4. 『萬葉集』には、この、人目、人の口を気にする男女の愛情を素材にした作品が甚だ多い。そういう狭い社会だったのであり、その状態と人々の心情は、現代でも日本は基本的に変っていないと言える。他人の「愛」の記事で溢れる週刊誌の類の隆盛を想うだけでも。
5. 次の文章、後三八一〇、前三八一、後三八一三、後三八一五、に出てくる二回の「夫」と四回の「夫君」は、それぞれ「せ」、「せのきみ」と訓む(角)ことにして、本表では「夫」の数には入っていない。
6. 『萬葉集』に早くから親炙した茂吉は、『赤光』の中でも、「ねもころころに」「たくひれの」「豊旗雲」「豊酒」「とことは」始め万葉語や万葉集の語法を頻用しているが、『赤光』に収録した一首「遠ひとに吾恋ひ居れば久かたの天のたな雲に鶴飛びにけり」の原歌(新聞「日本」明治四〇年九月九日)は「遠妻に吾恋ひ居れば久方の天のたな雲に鶴二つ飛ぶ」であり、「遠妻」が使われていた。